

幼児の表情理解と表情表出の発達について

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
鏡原 崇史

表情から感情を推測する、または表情を表出する能力はコミュニケーションを円滑に進めるにあたって必要不可欠な能力である。この表情を理解する能力と表情を表出する能力の関連性について検討した研究は少なく、幼児や自閉症児といった表情認知能力が十分に成熟していない人を対象とした研究は行われていない。そこで本研究では、健常幼児を対象に表情理解と表情表出の各能力について検討を行うと共に、表情理解と表情表出の関連性について検討を行った。まず、研究1において「嬉しい」「悲しい」「怒っている」の3表情課題に線画・イラスト・他者写真（大人）・他者写真（幼児）4種類の刺激図版条件を設定し、幼児の表情理解能力について検討した。また、研究2においては、「嬉しい」「悲しい」「怒っている」の3表情に対する幼児の表情表出能力について調べ、研究1の結果をもとに表情理解獲得群・未獲得群を設定することにより、表情理解と表情表出の関連性について検討した。

研究1の結果、全ての課題において年齢があがるにつれて表情理解の成績も上昇し、年中、年長では9割を越える正答率が示された。また、絵（線画・イラスト）と写真（他者写真大人・他者写真幼児）では「怒っている」課題において写真より絵の表情理解成績の得点が有意に高くなった。

次に研究2において幼児の表情表出について検討した結果、大学院生が幼児の表情の巧みさを評価した巧緻度の得点は「悲しい」<「怒っている」<「嬉しい」の順に高くなった。また、巧緻度の得点としては年齢間で有意な差はみられなかったものの、表情表出が可能な幼児の数は年齢があがると共に増加する傾向にあった。また、研究1の成績をもとに表情理解獲得群と表情理解未獲得群を設定し、各群における表情表出得点について調べた結果、表情理解未獲得群より、表情理解獲得群の「悲しい」表情の巧緻度が有意に高かった。

以上の結果より、表情理解においては実際の人間の写真より、線画やイラストといった表情刺激図版の方が表情を理解しやすいことが示唆された。また、表情理解能力は年齢が上がるにつれて上昇したものの、年少児においても全ての課題で7割以上の正答率があり、表情理解能力は3歳児ではほぼ獲得されていると考えられる。また、表情表出に関して、幼児にとって「嬉しい」表情が最も表出しやすく、「悲しい」表情が困難であり、各表情は幼児期において顕著な発達は見られないと考えられる。表情理解と表情表出の関連性について、表情理解獲得群が未獲得群より表情の巧緻度が高くなった理由として、表情を表出する際のその表情についてより詳細に想起することが可能であったためと考えられ、表情を適切に理解できている幼児ほど、より巧みな表情表出が可能になる可能性が示唆された。